



■写真1—総御影石造りの灯台

総御影石造りの灯台・男木島灯台

Full granite lighthouse - Ogiyama Island Lighthouse

上野 淳人

UENO Junto

株式会社日本構造橋梁研究所/
設計第二部設計第四課/課長



1—男木島

男木島は、高松市の北8kmに位置する南北2km東西1km、人口250人ほどの小さな島である。家々は斜面に重なり合うように建っており、道路は狭く、交通手段はもっぱら徒歩と自転車・バイクである。

高松市内でレンタサイクルを借り、朝一番のフェリーに乗る。男木港の集落を抜ける坂道を自転車を押して行く。畑で仕事をしているお婆さんに挨拶をしながら、山の中腹の道を登ったり降りたりを20分程繰り返した頃、突然絵本の中にあるような灯台が現れる。島の北端、備讃瀬戸を一望する“トウガ鼻”に建つ男木島灯台である。

2—日本の灯台の歴史

海の道しるべである航路標識は、今日では光波標識、音波標識、電波標識等が利用されている。しかし、昔は航路標識といえば灯台であった。

664(天智3)年に天智天皇が、唐・新羅の侵攻に備え対馬・壱岐・筑紫に防人をおいた際に、海岸防備のための通信手段として上げた狼煙が我が国の灯台の始まりと言われている。その後、遣唐使が無事に帰港できるように、九州地方の岬や島で昼は煙を上げ、夜は火を燃やして船の目印にした。江戸時代には、石積みの上に窓を障子で覆った小屋を建てその中で火を燃やす、我が国独自の「かがり屋」



■写真2—道の狭い男木島の集落



■図1—男木島灯台

「灯明台」と呼ばれる灯台が造られるようになる。しかし、鎖国政策や大船建造禁止などにより海運が低迷し、しばらくは我が国の灯台に大きな発展は見られなかった。

江戸末期に我が国にやって来た米英仏蘭各国は、開国条約の一つに光量の大きい灯台を建設することを要求する。しかし、当時の日本には西洋式灯台を建てる技術がなく、機械類もすべて外国より輸入する必要があった。そこで、フランス人技師フランソワ・レオンス・ヴェルニーに指導を受け、まず明治2年に日本最初の洋式灯台である神奈川県観音崎灯台が完成する。その後イギリス人技師リチャード・ヘンリー・プラントンに指導を仰ぎ、明治14年以降には日本人自らの手による近代的な灯台建設が行われることになる。

3—男木島灯台

男木島灯台はそのような状況の下、日清戦争直後の



■写真3—灯台と吏員退息所(2家族用に入り口が分かれている)



■写真4—備讃瀬戸を望む男木島灯台

海運助成策の一環として明治28年5月9日に起工され、同年12月10日に点灯された。備讃瀬戸海域では、明治5年に出来た鍋島灯台に次いで二番目に古い灯台である。

建設費用は5385円2銭5厘、現在の価値にしておおよそ3100万円、総御影石造りである。建設当時、地上から12.4m(海面から16m)の高さにある灯火は、石油灯で光達距離12.5海里(約23km)を誇った。その後ガス灯化、電灯化となり設備は更新されたものの、灯台の建屋は当時のままの姿を残している。

男木島灯台は、内部のらせん階段をも御影石で出来た凝った造りになっているが、この様な総御影石造りの灯台は、全国で男木島灯台と山口県の角島灯台の2基しかない希少なものである。

4—灯台を守る

明治の灯台の光源は石油であったから、職員2名が家族とともに住み込み、昼夜を通しての管理が必要であった。そのため灯台には吏員退息所という官舎が併設されていた。男木島灯台の吏員退息所は御影石造りの立派なものである。365日灯台の灯を欠かさないための灯台守の苦勞は、並大抵のものではなかった。

男木島灯台を一躍有名にしたのは、昭和32年に公開された映画「喜びも悲しみも幾年月」である。全国の灯台を巡る灯台守夫婦の日常を通して、夫婦の愛情と守灯精神を綴った話である。映画の中の男木島灯台は、主人公が台長になって初めて赴任した記念すべき灯台である。

映画の中で、主人公夫婦が灯台のランプのレンズを磨いている場面がしばしば出てくる。こうした灯台守のたゆまぬ努力により航路の安全が守られてきた。

昭和62年に男木島灯台は無人工化され、吏員退息所は資料館として整備された。このような旧施設を改築した資料館は全国的にも珍しい。平成15年には「完成

から百年を越えた今も航行する船の安全を守っているもの」として土木学会により土木遺産として認定された。

〈参考資料〉
男木島灯台資料館
高松海上保安部ホームページ
松竹ホームビデオ「喜びも悲しみも幾年月」